

ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念
講演と映画と朗読の集い
～ポーランド、サハリン、北海道～



〔第1部〕 講演 13:30～15:10 (司会:越野剛)

あいさつ:マリア・ジュラフスカ (ポーランド広報文化センター所長)、木村和保 (ブロニスワフの孫)

井上紘一 ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事

佐々木史郎 ピウスツキが収集したアイヌ衣文化

新井藤子 ピウスツキが日本に残したイメージ～明治から現在まで～

〔第2部〕 ドキュメンタリー映画 15:25～16:15

ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄～

ヴァルデマル・チェホフスキ監督 (2016、日本語字幕付き)

〔第3部〕 朗読 16:30～18:20 (司会:熊谷敬子)

長屋のり子 盲いたチュフサンマの悲歌 (自作詩 2017、改作)

白井順 チュサンマとピウスツキとトミの物語 (花崎皋平作、未知谷、2018.5) より

19世紀末から20世紀初め、サハリンに流刑されたポーランド独立運動の活動家、ピウスツキ。アイヌ民族調査研究者、アイヌ女性チュフサンマとの結婚。しかし独立運動が彼を祖国へと旅立たせ、残されたチュフサンマ。20世紀、一人のアイヌ女性、村山トミの生き方と心情が、100年前のチュフサンマとピウスツキの物語と重ね合わされる。

酒谷茂靖 ペンリウク バフンケ 26時のペウタンケ (土橋芳美作 2018、書き下ろし・初演)

会場：北海道大学学術交流会館 1F 小講堂

日時：2018年7月29日(日)

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、北海道ポーランド文化協会
ポーランド広報文化センター

後援：駐日ポーランド共和国大使館

この企画は、ポーランド独立回復100周年記念事業の一つとして、実施されるものです。

(図) ブロニスワフ・ピウスツキ, Adomas Varnas 画, 1912, ユゼフ・ピウスツキ博物館蔵、画像提供 Witold Kowalski

ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事

井上 絃一

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918）はリトワニア生まれの優れた人類学者です。今年パリで客死してからまさに百年が経過、命日の5月17日にはパリとモンモランシー（フランス）、ジヨリ（ポーランド）、白老（日本）で追悼行事が挙行されました。本日のイベントも没後百年を記念するものです。

ピウスツキの生涯は、幼少年時代のリトワニア期（1866～86）、ペテルブルグ期（86～87）、流謫先の樺太島北部で過ごしたサハリン前期（87～99）、浦塩期（1899～1902）、研究者として実地踏査に従事したサハリン後期（1902～05）、日本経由で帰還して以降の欧州期（1906～18）の6時期に区分されます。

今回は時間の都合で、ピウスツキの画像を手引きとして各時期を大掴みに解説するだけに留めます。詳細については、下記の資料を御参照ください。

ピウスツキはサハリン前期にニヴフ、後期にはアイヌ（エンチウ）、ウイльтаのフィールドワークに従事し、辛うじて保持されてきた彼らの言語や伝統文化を鋭敏な耳と暖かい心で、エディソン式蠟管蓄音機やカメラなどの近代機器も駆使して記録、希有な学術遺産を残しました。彼の仕事はアイヌ学・ニヴフ学・ツングース学の草分けとして高く評価されています。欧州期にはリトワニア人やタトラ山地民の民俗研究で、また博物館学でも先駆的業績を残しますが、日本とポーランドの文化交流においても魁（さきがけ）の一人として活躍しました。

北海道大学医学部は、ピウスツキの妻チュフサンマの叔父に当たる「樺太酋長バフンケ」（日本名：木村愛吉）の頭蓋骨を収蔵しています。児玉作左衛門医学部教授らが1936年8月、樺太東海岸の相浜で墓地を暴いて入手したものです。同大学は本年7月21日、遺族（ピウスツキとチュフサンマの孫・木村和保氏）からの請求に応じて遺骨の返還を決定した旨、木村氏へ通達しました。最後に、この問題にも言及するつもりです。

参考資料

高倉浩樹監修、井上絃一訳編・解説『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～』（東北アジア研究センター叢書第63号）、仙台・東北大学東北アジア研究センター（2018）

井上絃一「ピウスツキのサハリン研究とバフンケの髑髏（されこうべ）」（電子版）

<http://hokkaido-poland.com/events/PilsudskiInoue20180225.pdf>

井上絃一「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」改訂版（電子版）

<http://hokkaido-poland.com/events/ChronologicalRecordRevised2018.7.pdf>

ピウスツキが収集したアイヌ衣文化

佐々木 史郎

ここでは、当「集い」のチラシやポスターにも使われている肖像画（1912年にクラクフで描かれたもの）でピウスツキが着用している着物に着目して、それがどのような着物（素材、作り方）であり、どの地方のものかを明らかにしていく。

B・ピウスツキはアイヌに関する論考と写真と音声資料を数多く残したが、それと同時に実物資料も少なからず収集している。その主たる部分は現在ロシア、サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（通称クンストカーメラ）に収蔵されているが、そのほかにも同市の

ロシア民族学博物館、ウラジオストクの沿海地方総合博物館、ユージノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館、さらにはドイツ、ライプツィヒの民族学博物館、オーストリア、ウィーンの世界文化博物館などにも収蔵されている。

この肖像画でピウスツキが着用しているのは、その布地の色合いと文様から、サハリンのアイヌに特徴的な衣服である「テタラペ」の可能性が高い。テタラペとは「白いもの」という意味で、その主要な素材であるイラクサ繊維の布が白く輝くことからそのように呼ばれたといわれる。サハリンでは、北海道のアイヌが多用したオヒョウ、シナノキなどの長い繊維が取れる樹木が少なかったためか、イラクサから繊維を取ることが多く、テタラペはサハリンに特徴的な衣服である。

ピウスツキが着用しているテタラペでは、衿周りと同肩から背中にかけて、そして袖口に独特の文様が見られる。その描かれ方から、まず幅の広い藍木綿を縫い付け、その上に赤い綿織物もしくは毛織物の布を切って伏せ、その縁と中程に色糸の刺繍を施して留めていると判断できる。赤い布の上に少し間延びしたハート型の模様が見える。

この種のテタラペはヨーロッパ、ロシア、日本の博物館に何点か収蔵されている。最も似たものはロシア民族学博物館が所蔵する、V・P・ヴァシーリエフがサハリン東海岸のアイ・コタン（後の栄浜村相浜）で1912年に収集したものである。そこはピウスツキがその8年前（1904年）まで妻子とともに暮らしていたコタン（村）である。この肖像画でピウスツキが着ているテタラペは、彼の妻チュフサンマが愛情を込めて縫製した逸品だったのかもしれない。

ピウスツキが日本に残したイメージ～明治から現在まで～

新井 藤子

存命中から死後に至るまで、ブロニスワフ・ピウスツキには実に多面的な人物像の記録が存在します。北海道ポーランド文化協会においても、この2、3年のうちに、新生ポーランド共和国初代国家元首のユゼフの兄として、世界有数の人類学者・アイヌ民族研究者として、それでありながら、今となってはワルシャワの雑踏の中で思い出されることすらない傍流人物として、かたや顕彰事業の中では、ロシア、ドイツ、リトアニアなど多岐にわたるナショナリティを想起させる地球人の魁として、さらには樺太アイヌ女性との悲恋をともなう婚姻を経験した碧眼の美丈夫として、多くの視点によって様々な形のピウスツキの人物像が描かれ、あるいは史実とされる事柄が伝えられています。

もともとピウスツキには、二葉亭四迷が評した「あどけない真面目な態度」や横山源之助による「学者的態度を以て研究するばかりでなく、正義博愛の観念強く」、幸徳秋水の夫人の「可愛い」という記述にもみられるように、彼と関与するあらゆる人々をして、積極的に「～な人」と語りしめずにいられなくさせる魅力があったようです。これは彼の心優しい気質や教養あふれる振る舞いによるものであるのはもちろん、波乱や移動変転に満ちた生涯の行程のなせるものともいえます。また、多くの歴史的記述や言説に触れていると、無意識のうちに関わる人々の精神を鼓舞し、生を前進させ、現実的に社会的な実績へと昇華させる才にも長けていたことが窺い知れます。この一事例としては、欧州帰還後のピウスツキによるポーランド民族音楽調査研究が、ショパン没後のポーランドにおける偉大な作曲家カール・シマノフスキへ多大な影響を与えていたことが挙げられます。

当講演では、明治期から現在までにおよんで主に日本の資料から確認できる、生活、労働、恋愛、研究、人物交流等のジャンルにおいて構成され尽くることのない、多様なピウスツキの人物像について触れてまいります。

出演者プロフィール

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918）はリトワニア生まれの優れた人類学者です。樺太島に流謫され 19 年の歳月を過ごした極東ではアイヌ・ニヴフ・ウイльтаなど極東先住民研究に従事、この分野では草分けと評価されています。1980 年代半ばには北海道大学がピウスツキの収録した録音蠟管の音声復元に成功し、アイヌ最古の肉声が復元されたことが話題になりました。

今年（2018）は彼の没後百年と、ポーランド独立回復百年、そして来年（2019）は両国の国交樹立百年を慶賀するさまざまな行事が計画されています。日本の没後百年記念イベントでは 3 名の専門家の講演と記録映画上映に加えて、ピウスツキの妻チュフサンマとその叔父バフンケをめぐる詩作 3 篇の朗読も企画しました。日本におけるピウスツキ研究がその裾野を着実に広げる現場にお立ち会いください。

〔第 1 部〕講演

井上紘一（いのうえ・こういち）1940 年生まれ。北海道大学スラブ研究センター教授を経て同大学名誉教授。文化人類学（北方ユーラシア）専攻。主要著作：ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌（2018）、*A Critical Biography of Bronislaw Pilsudski*（2010）、樺太アイヌの民具（2002）など

佐々木史郎（ささき・しろう）1957 年東京都生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。国立民族学博物館助手、助教授、教授を経て、2016 年同名誉教授。国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹。専攻は文化人類学。1980 年代よりシベリアのトナカイ飼育文化、狩猟文化とロシア極東地域の先住諸民族の近世史、近代史を研究する。主な著書に『シベリアで生命の暖かさを感じる』（臨川書店、2015 年）などがある。

新井藤子（あらい・ふじこ）1972 年生。1996 年 3 月神田外語大学中国語学科卒業後、会社勤務等を経て 2012 年 4 月より北海道大学大学院文学研究科修士課程在籍。専攻は博物館学。現在はピウスツキの博物館学者としての側面を研究している。口頭発表：環オホーツク海文化のつどい（2014.8）、北海道ポーランド文化協会講演会（第 75 回例会）（2016.2）、Konferencja «Из века в век...»（サハリン州郷土博物館、2016.9）。ポスター発表：III Kongres Zagranicznych Badaczy Dziejów w Polski „Dawna Rzeczpospolita: Historia Pamięć – Dziedzictwo”（クラクフ、2017.10）などにて発表

〔第 3 部〕朗読

長屋のり子（ながや・のりこ）手芸誌主筆を経て詩人、随筆家、主著 小説「樋口芳男の手記」プレス東京出版、詩集「睡蓮」ぼえとりくす舎、「蝶の背に乗って」アニマアニマ協会ほか、小樽 春香山在住

白井順（しらい・じゅん）小樽市の和楽器（箏や三味線など）専門店、二見屋邦楽器店主。視覚障害者の為の朗読本作成ボランティアで基礎を学ぶ。「淡々と、でも」という読み方はその時から。札幌 山猫座朗読会、FM おたる等に出演。

花崎皋平（はなざき・こうへい）1931 年生まれ、小樽在住、文筆業（哲学・社会思想・詩など）著作「生きる場の哲学」、「アイデンティティと共生の哲学」、「静かな大地～松浦武四郎とアイヌ民族」ほか、詩集「アイヌモシリの風に吹かれて」、「風のとおる道」、「チュフサンマとピウスツキとトミの物語」

酒谷茂靖（さかたに・しげやす）「朗読」の表現宇宙の豊かさ深さに心魅かれます。肉声による作品世界の表出、時空を越える心の旅を願い、活動を続けております。

土橋芳美（どばし・よしみ）詩人、「痛みのペンリウク：囚われのアイヌ人骨」、草風館、2017（第 51 回北海道新聞文学賞〈詩部門〉佳作）ほか



(1) チュフサンマ, 北里闌 撮影, 1931 (2) バフンケ, 太秦供康 画, 1905, 北海道博物館蔵 (3) ペンリウク, Adolf Fischer 画, 1897, 国際日本文化研究センター蔵 (4) ブロニスワフ・ピウスツキ百年忌追悼行事, 白老・旧アイヌ民族博物館, 2018.5.17